



＋ 本学研究成果のオープンアクセス化を促進する

⑧ 「Open Access Week」をご存じですか？

オープンアクセスウィークは、毎年10月に世界各地でオープンアクセスに関連するイベントを開催する取り組みです。今年のテーマは“*It Matters How We Open Knowledge: Building Structural Equity*（いかに知識をオープンにするか構造的公平性の構築を目指して）”。多様であり、公平であり、包括的な学術情報流通基盤のあり方を考えます。附属図書館では10月18日（月）から11月7日（日）までの間、オープンアクセスの動向や本学の取り組み、本学教員にご協力いただいたインタビューの様子を、webサイトや1階展示スペース（Yomoccaコーナー）にて紹介いたします。ちょっとしたクイズ（本学教職員・学生を対象）もご用意しておりますので、ぜひご覧ください。

⑧ そもそもオープンアクセスとは？

学術論文等の研究成果に対して誰もがインターネットを介して無料でアクセスし、その再利用を可能にすることです。その意義は、（主に商業出版される）ジャーナル価格の継続的な上昇への対応措置や研究開発の費用対効果を上げるとともに、学際的な研究やイノベーションの創出を促して、その成果を社会に還元することなどにあります。また著者にとっては、オープンになった論文へのアクセスが向上することで論文の閲覧数が増加し、引用される可能性が高まります。こうした論文等のオープンアクセス化は世界的な潮流となっており、日本でも公的研究資金による研究成果（論文、研究データ等）については原則公開するよう提言がなされています。

さらに近年ではICTの進展に伴って、研究データを含めた研究プロセスのデジタル化と共有に取り組む、オープンサイエンスが国内外で進展しています。その具体例として、個別の大学・研究コミュニティによる研究データの管理・公開に係るポリシーや体制の検討※1や研究データ管理基盤の構築※2、研究データそのものや関連する論文と合わせた学術情報検索サービスの開始※3などが挙げられます。また国の政策としても、研究活動における自由や多様性、オープン・アンド・クローズ戦略などに配慮しつつ、大学等において研究データの管理・利活用を進めていくことが求められています※4。

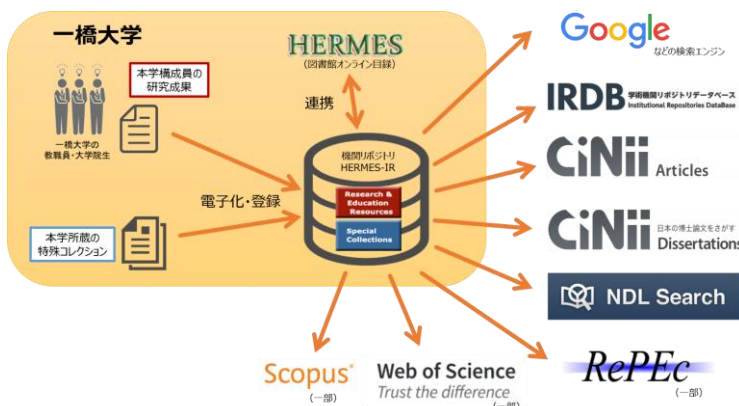
- ※ 1：大学ICT推進協議会から「学術機関における研究データ管理に関する提言」（2019年5月）、「大学における研究データポリシー策定のためのガイドライン」（2021年7月）などが刊行されています。
- ※ 2：国立情報学研究所が2021年3月に、個人の研究者あるいは研究グループが研究データや関連の資料を管理するための研究データ管理基盤「GakuNin RDM」の本運用を開始しました。
- ※ 3：国立情報学研究所が2021年4月より、文献だけでなく研究データや研究プロジェクト情報なども含めて横断的な検索を可能とするCiNii Researchを本公開しました。
- ※ 4：統合イノベーション戦略推進会議が2021年5月に、「公的研究資金による研究データの管理・利活用に関する基本的な考え方」を公表しました。

⑧ 本学のオープンアクセス方針と機関リポジトリ

本学は2017年10月19日に「一橋大学オープンアクセス方針」を策定し、出版社、学協会、学内部局等が発行する学術雑誌に掲載された本学に在籍する専任教員の研究成果を、一橋大学機関リポジトリ（HERMES-IR）によって公開しています。

HERMES-IRは、上述の学術雑誌や本学が刊行する研究紀要の論文の他にも、博士論文、ワーキングペーパー等各種研究報告書、各種研究データ、広報資料、学術史料資料、特殊コレクションなども包括的にデータベース化し、広く世界に発信しています。

- HERMES-IR
<https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/ir/>
- HERMES-IRへの登録方法
https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/ir/how_to.html



附属図書館では、「オープンアクセス」や「機関リポジトリ」、「研究データ」をキーワードに、学術情報流通の動向やHERMES-IRを使った学術情報の発信について、3人の先生方にお話を伺いました。

③ 田村 俊夫 教授（経営管理研究科）

（HERMES-IRで研究成果を公開することになったきっかけについて）

- ・所属する研究科の教授会で、本学のオープンアクセスポリシーについて説明を受けました。従来私が講座を担当するなど、関わりの深い出版元を中心にこのポリシーを説明し、HERMES-IRでの論文公開に了承をいただいています。

（HERMES-IRで研究成果を公開することの効果について）

- ・私が執筆した論文の閲覧可否について、以前は大学の窓口や私自身に照会が来ることがありました。HERMES-IRで論文を公開するようになってからはそうした照会が減りましたので、HERMES-IRで直接お読みいただいていると思います。また、原稿の執筆依頼を受けた際にその経緯を伺ったところ、HERMES-IRで公開していた私の論文を事前に読んでくださったそうで、HERMES-IRを通した研究成果の発信に効果を感じています。

③ 佐藤 仁史 教授（社会学研究科、『一橋社会科学』前編集委員長）

（HERMES-IRを使った『一橋社会科学』の刊行について）

- ・『一橋社会科学』は他の刊行物に先んじて、2009年に電子媒体をメインとした公開を開始しました。当初はこのことに対する懸念もありましたが、機関リポジトリに対する認知度も高まり、HERMES-IRを使うことで迅速な情報発信や流通範囲の拡大を実現できていると考えています。

（HERMES-IRや機関リポジトリ担当者に望むことについて）

- ・HERMES-IRで公開することによって論文に識別子が付与されたり、各論文のダウンロード回数が把握できたりするのは良いことだと思います。HERMES-IRの機能や公開の仕方について特段の課題はありませんが、もし学術情報の発信に有益な機能や動向があれば、編集委員会にも情報提供をしていただきたいと思います。

③ 阿部 修人 教授（経済研究所）

（扱う研究データの性質について）

- ・一言に「研究データ」といっても、入手や利用の仕方・容量・利用後の扱い方といった観点などから、様々な捉え方ができます。こうした違いを把握した上でそれぞれのデータをどのように扱うか、方針を立てて利用することが求められます。

（研究データの公開に関する動向について）

- ・私の専門分野の学術雑誌では、十数年前から論文を投稿する際にデータの提出も求められるようになりました。また、国内の研究機関からも、研究データの共有を目的としたデータアーカイブが提供されています。こうした状況で、もしHERMES-IRでも研究データを収載するのであれば、DPやWP等のサブリメンタルデータを対象とするなど、本学の研究成果に関連するものを扱うといったことが考えられるのではないのでしょうか。

HERMES-IRは、本学のオープンアクセス方針や学術情報流通の動向に沿いつつ、本学研究成果のオープンアクセス化を支援しています。インタビューにご協力いただきました先生方、ありがとうございました。